

辰野
隆

「彼岸過迄」

「彼岸過迄」

『文学』一月号所載、片岡良一氏の「『彼岸過迄』の意義」と題する論考をきわめて興味深く読んだが、それが機縁となつて、僕は久しぶりで、この小説を読み直してみた。

漱石の中心思想の定型を「彼岸過迄」に求める見方は、僕にも異論がない。片岡氏の謂うごとく、「彼岸過迄」は、作者のその以前の思想を濾こして纏め、その後の思想を予告し、準備するものである。しかも、予告でも準備

でもありながら、既定的なものをだいたい包含している点においては、片岡氏の「『彼岸過迄』の意義」なる一文はまことに読みごたえのあるものであった。

僕は今ここで、この小説の意義を考え、主人公須永市蔵の性格・心理を詳説するつもりではない。ただ、二十何年か前、帝大法科の学生であった僕を深く動かした、当年の思出といったようなものを少々書きつらねて見ようと思う。

「彼岸過迄」が初めて朝日新聞に掲載されたのは明治四

十五年の一月からであった。僕は毎朝この小説を読むのが無上の楽しみだった。「風呂の後」、「停留所」、「報告」、「雨の降る日」とだんだん読んでいって、ついに「須永の話」に至って、僕は異常な共感と親しみをもって、青年須永市蔵を愛し始めたのであった。須永は、それまで僕が実人生において知っていたいかなる秀才よりも聡明で奥床しい人物であった。もしかかる青年が実際に僕の近くに現われたら、僕は彼を生涯の友として交^{かわ}らぬ交りを結び得るだろうと思ったのであった。久しぶりで「彼岸過迄」を読んで僕は永く隔てられていた旧友にめぐり

会ったように想い、当年の彼への思慕を新たにしたのである。

須永の女性・恋愛に対するストイックな諦観が僕にはなによりも頼もしく思えた。すでに少年期から女性に対する尊敬の念などは微塵もなく、恋愛は美男美女の特権としてまったく他界の消息だと思っていた僕が須永が完全に嫉妬を克服して千代子を綺麗に諦める過程をきわめて当然だと思った。彼のごとく「我」を凝視する男には、恋愛は誘惑であつても、魅了とは成り得ないだろうとも思ったのである。明治末期インテリゲンチヤの消極的個

人主義は須永の裡にその代表的存在を牢乎ろうことして基きあげている。須永が法科の卒業受験生でありながら、すでに夙はやく、社会生活の夢や青雲の志や富への憧憬しょうけいをまったく放下して、狭いながら、自我の奥に人生探究の耿耿こうこうたる瞳ひとみを据えたところは、当年の法科の秀才よりもむしろ文科の人材に往々見受けた貴とつとい型であつた。それは今の法・文学部の学生気質と比較して著しいコントラストを呈している。もとより僕は今の学生が生活の落伍らくご者しゃたらざらんとする就職焦慮を軽侮する意志は毛頭ないのみか、現代の社会苦が幾万の学生を卒業の門前に脅か

しているのを眺めて心から同情を禁じないのだが、それにもかかわらず、あまりに実際的になった今の学生に二昔前の個人主義思想と数年前までの批判反抗の熱意の衰えたのを遺憾に思うのである。しかのみならず、社会的イデオロオグの群が個人主義を弊履のごとく捨てた——捨て得ると思った——ところにも重大な欠陥があったのではないか。インテリ層の現代批判が総般的に抑圧されたまま、ほとんど無風状態に陥ிட்டのは、決して弾圧の奏功ではなくして、インテリの苦悩にインテリみずから鎮静剤を盛ったとしか思えぬのである。

個人主義も自由主義も、幾多の欠点を含むとはいえ、要するに人間が人間らしくなりたい自然の衝動から確乎たるイデオロジイを樹立するまで、幾世紀を重ねて積みあげた精神的肉体的の成果なのである。わが邦のマルキシストやコンミニストの中に、一人ひとりとして自己の名を署しるさずに所論を公にした者がなかつたこと、自己の名を抹殺するのが公論の必須の条件であるとまで自覚した者が皆無であつた事實に徴しても、個人主義や自由主義がいかに深く近代人の深所に徹していたかを知るべきである。現代の青年は、もう一度個人主義や自由主義や孤独

や懷疑をしみじみ顧みて見ても決して徒勞には終るまい。

片岡氏の文中には次の一節がある。

『須永の話』の後に『松本の話』をつけ加えた作者はそうした孤独と懷疑との虜とりことなつた須永を、さらにその母からも引離して——彼が彼女の子ではなく、今は生死も知れない女のいわば不義の子であつたことを明かにして、彼をますます孤独の底に突落した後、そこからさらに『考えずに観るみ』という境地に浮み上らせることによって、そこに静かに調和された世界のあることを明示

しているのであった」かくて、片岡氏は、さらに漱石のそういう見方は孤独地獄や厭世哲学の正しい解決でもなく、むしろ解決の放棄乃至問題の放棄ないしであり、主観的な飛翔、感覺世界への逃避である。漱石が須永一人の主観的な救いで満足しているのは、「個人主義というものを正しく周到には理解せず、これを単なる為我主義としてのみ受取っていたのであったことが、知られると同時に、その思想的立場を最後まで放棄できなかつた人であったことが、知られるのではないかと思う。それができたら、漱石はもっと俗化するか（俗化というよりも社会化と言

ったほうが適当であろう)、でなければより清澄な宗教的超脱に行ったはずで、『考えずに眺める』——言換えれば、安全地帯にいて、なお危険区域に執着するというにも似た、そんな不徹底さに止まるはずがなかったのだから」と言っている。

しかしながら、漱石は「行人」と「こゝろ」においてはついに安全地帯を脱して危険区域に入り、狂から死の境を彷徨していたといつて誤りではないだろう。「行人」や「こゝろ」の主人公はすでに孤独地獄をインテリの特

権として優越感と結び付けるような奢おごった心は持つにも
持ち得ず、かえって危地に陥おといって、新たなる安全地帯
——則天去私の境地——を欣ごんぐ求ぐしている。ただし、僕に
は、この種の孤独地獄と則天去私との間には、近代的な
社会生活なり市民生活なりの自覚が生れねばならぬと思
われるのだが、漱石は——鷗外もまた——そういう社会
意識が日本のインテリ層を席卷する以前に死んだのであ
った。それは返す返すも惜しいことであつた。しかもそ
れ以上に僕等が物足らなく思うのは鷗外・漱石以後、両
大家の貴い遺産を十分に活用して、見事な社会小説を描

きあげた傑物はまだ一人も出ないことである。しかし、そういう方面の佳作も追々現われてくるに相違ない。口や筆で社会とか市民とか言っても、それが実感となり血縁となっておのずから社会小説が生れるにはなお十数年あるいは数十年の歳月を要することだろう。

それはとにかく、「彼岸過迄」の「考えずに眺める」境地を一概に不徹底と断ずるのは必ずしも当るまい。もしポオル・ヴァレリの謂うごとく、無限の欲望の肯定にヨーロッパ精神のレエゾン・デエトルを求むるなら、僕等はこれに対して、かえって無限の欲望に幸福を觀じ、

むしろ無限の欲望を純粹諦觀の域まで淨化する自我陶冶の道を修し得ると思うのである。しかもそこから社会的ソリダリテへの新たなる歩みが踏み出され得るようにも思われるのである。

日本文学電子図書館

「彼岸過迄」

著 者 辰野 隆

制作者 宮澤一郎

底 本 「漱石全集 第 9 卷」角川書店

昭和42年10月10日 6版発行

日本文学電子図書館